

平成 26 年度本会員活動方針

平成 26 年度本会員代表幹事
一木 美穂（日本郵便）

1 はじめに

1 年間の本会員活動方針を、との大役を仰せつかって以来、歴代の代表幹事の方々の知見の高さに到底及ばないものの、今の自分ならでは、皆さんにお伝えできることは何か、頭を悩ませてきたが、無情にも締め切りは瞬く間にやってきた（失笑）。今の自分にできる最善の解として、下手に背伸びせず、現場と向き合ってきた自分の職務体験を通じて得た問題意識をベースに、まとめてみたい。

2 現場と向き合って（職務体験を通じて）

この 2 年間で、現場の郵便局の意見要望の窓口として、現場の声を業務改革につなげる職務に従事してきた。郵便局は全国に 2 万 4 千局、直営局だけでも 2 万局弱ある。様々な現場の声に、多くのことを考えさせられた。現場からは様々な不満や提案が寄せられる。ただし、現場の個々の要望は、必ずしも現場全体を代弁しているとは限らない。「本社に言っても変わるのに時間がかかる。」「どうせできない理由ばかりで、何も変わらない。」というあきらめ感から、問題意識を封印してしまう現場もある。結局、本社に声を伝えやすい立場の人からの要望が、多く伝わってくるようになる。

問題は、こうした声のうち、必ずしも現場の大勢でない意見も、現場の全体像であるかのように本社で錯覚してしまう恐れがあることである。せっかく現場の声を受けて改善策を講じても、「以前のままだよかった」「別の改善策を講じて欲しかった」という声が事後的に聞こえ、愕然とすることもある。何かを変えること自体、現場は負担になるのである。五十歩百歩の改善策では、効果は実感できない。

つまり、「見えている」顕在化した課題は氷山の一角であり、その対応だけに満足してしまっては不十分である。いかに「見えない」潜在的な課題を察知し、課題の全体像を捉えるかが重要となる。

また、現場は企画のプロフェッショナルではないので、本社が欲しい情報の形では必ずしも伝わってこない。このため、改善策がすぐに見えない要望は、

単なる不満として却下されてしまうことが多い。しかし、実はこういった要望にこそ、取り組むべき大きな課題が潜んでいることが多い。すぐに改善策が見つかる要望は、個別の表面的な課題にすぎないことが多いのである。

よく聞いてみると、一見単なる不満のようでも、根底で実現したいことの目の付け所は良く、その真の趣旨を正しく理解すれば、要望通りの対応策でなくても、他のアプローチで大きな課題が解決できることもある。ここで「企画力」がものを言う。

留意点は、対応策の実現可能性を追求しすぎると、近視眼的に陥りがち、ということである。結果、統一感なく、場当たりの施策が乱立してしまう。実現できない夢物語は困るが、すぐに実現できないことも、中長期で段階的に取り組むことで達成できる場合もある。大きな課題になるほど、こういったアプローチが有効となる。

この2年間の気付きを、不出来だったことの反省も込めてまとめてみた。課題の本質を見極め、「企画力」を発揮して解決を模索するには、結局、特効薬はなく、地味な努力を積み重ねるしかないのではないだろうか。

3 26年度活動方針 ～「企画力」を磨く～

前述の問題意識をもとに、今年度の浩志会活動で目指したいことを、一言でまとめると、「企画力」を磨く、ということになる。

◆「企画力」を磨くとは

① 物事の全体像・本質を「見る」

まず、現場を自分の目で確かめるのが第一歩である。現場を虚心坦懐に見つめ、表面上の事象のみにとらわれず、全体像の把握に努め、本質が何かを問うことが重要である。

② 目的に照らして手段を「深める」

真に解決すべき課題は何か、目的をよく見極めて、対応策を検討する。前例や慣習のやり方が必ずしも最善とは限らない。見方を変えることで、よりよい別案に気付くこともある。同様に、ある対応策は実現困難でも、解は一つではなく、別の対応策を工夫できることも少なくない。

③ 発想を「広げる」

最善の対応策を模索するべく、発想を柔軟にするためには、広くアンテナを張り情報を得て、自分の知らない世界に刺激を受けることが有効である。そうやって、自己流のやり方の欠点に気付き、考えを広げることができる。井の中の蛙になってはいけない。

④ 手応えを実感しながら「続ける」

さらに継続は、大きな課題に取り組むためには不可欠である。何らかの失敗があっても、そこでやめてしまってはもったいない。失敗に学び、アプローチを変えることは、よりよい取組みを創出する貴重な契機である。小さくても目に見える成果が上がるまで根気よく続けることで、手応えが実感できる。これが、さらなる継続の原動力となる。

◆浩志会本会員の皆様へのお願い

浩志会では、年代や肩書きを越えて、参加者がお互いに師匠であると同時に弟子でもある。刺激を受けあうことで、自分を無意識のうちに縛っている前例や慣習から解き放たれ、気づきを得る貴重な機会である。こうした機会を最大限活かし、「企画力」を磨く1年とするため、お願いが2点ある。

【お願い①】時間を作る ～全員参加～

これは何より、浩志会活動の原点である。会員の皆様お一人お一人に時間を作っていただくことで支えられている。日々ご多忙なことで重々存じ上げているが、時間の生み出しに是非、ご尽力お願いしたい。

【お願い②】周囲へも「広げる」

先日の夏季全体研修会でも、単に自分の知見を広げるに留まらず、得た貴重な知見をいかに浩志会の外にも広げるか、との課題認識を、多くの方と共有した。どう周囲を巻き込み、より大きな力を発揮するか。その視点を大切に、活動の幅を広げる1年としたい。

これからの1年、副代表の加藤さん(国土交通省)、吹田さん(武田薬品工業)をはじめとする幹事団メンバーが一体となり、浩志会の良き伝統を受け継ぎつつも、過去に縛られない自由な発想で、活動を盛り上げていく所存である。皆様からも忌憚のない御意見をいただきながら、実りある活動を共に創り上げることができれば幸いである。

以 上